



教職大学院 Newsletter No. 119

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.2.15

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2019 Spring Sessions 特集号

**実践し
省察する
コミュニティ**

*Round Tables:
Spring Sessions 2019
for Reflective Practice
and Organizational Learning
At University of Fukui*

For Communities of Practice and Reflection since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル
2019 spring sessions
2/15(fri) 17:30-18:40
16(sat) 13:00-17:40
17(sun) 8:20-14:00
福井大学総合研究棟V (教育系1号館) 総合研究棟

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2019.2.15-17

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
共催 社会教育実践研究フォーラム
後援 福井県教育委員会・福井観光コンベンションビューロー (予定)

内容

ラウンドテーブルの意味を問う (2)

実践し省察するコミュニティ 実践研究福井
ラウンドテーブル 全体スケジュール (5)

Pre-session	(6)
ZoneA 学校	(6)
ZoneB 教師	(7)
ZoneC コミュニティ	(10)
ZoneD 授業	(11)

省察的实践学会 発足に向けた第5回準備会 (12)

Round Table Cross Sessions (13)

Students' Poster Session (14)

実践し省察するコミュニティを結び支える (15)
ラウンドテーブルの歩み (17)
ラウンドテーブルの広がり と 深化 (19)

アーカイブ (21)

基金のお知らせ (28)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2019年2月の開催をもって36回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。初日のプレセッション、学校（Zone A）・教師（Zone B）・コミュニティ（Zone C）・授業（Zone D）の各領域に分かれた2日目の各ゾーンのセッションを経て、最終日はクロスセッションでの語り合い・聴き合いを行います。この3日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

ラウンドテーブルの意味を問う

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科長

松 木 健 一

学校の年度末は慌ただしい。それでなくても長期実践研究報告書を書き上げなければならず、院生のみなさんは輪をかけて忙しい毎日を過ごされたことだろう。ところが、報告書を提出してもホットする暇もなく、今度は、ラウンドテーブルの準備をしなければならない。思わず「私に自由を！」と叫んだ方もおられるのではないかな。

ここでは、専門職である教師にとって「ラウンドテーブルの意味は何か」、「なぜラウンドテーブルが今必要なのか」について、あらためて問い直しをし、確認することで慌ただしさの気休めになればと願っている。

先般、ある大学教員から教職大学院制度の批判メールが届いた。修士課程を廃して教職大学院に一本化する方針を頭ごなしに文科省から指示されても、ろくな大学改革にはならない。結局、既存の修士と変わらない課程になるのが落ちである。そもそも安倍政権の教育軽視の傾向が続く限り、小手先の改革を進めても日本の教育はよくなる。日本に未来はない。おおよそそんな趣旨であった。私は字面を追いつつも、自分の中に広がる空虚感を抑えることができず、目の動きとは別のことを考えはじめていた。教育改革のことではない。人のものの考え方についてである。

人は生まれたときから制約を受けて存在する。ヒトの持つ能力（地頭やガン遺伝子などの生得的なもの）には差があり、生まれた家族の経済状態にも格差がある。いわんや両親を選ぶことなどできない。そもそも命にも限界があり、誰もが老いて死ななければならない。きわめて不自由で束縛された中で、人は生きている。どんなに頑張っても、このような制限や限界から自由な人など存在しない。私が考えていたのは、この不自由さ（束縛感）の受け止め方であった。努力を重ねてきた人ほど、運命論や決定論が覆いかぶさがりがちになり、自己の凡庸さや境遇を恨み、時代や社会や国家を恨む。とどのつまり、自分の現状を他者のせいにして怒りをぶちまけるか、諦めるしか対処の方法はない。友人のメールを読んでいて感じた違和感は、そのことであった。

実は、頑張る人ほど不自由さや気詰まりに直面するのもかもしれない。自分ではどうすることもできない障壁の大きさ、やればやるほど理想とは掛け離れていく現実課題、社会のためと思って行動したこと

に対し市井の人々から浴びせられる心無い非難、他者との関係に配慮して譲歩しながら進めてきた活動が、いつのまにか虻蜂取らずになったことなど、枚挙に暇もない。こんな体験は、真摯に子どもに向き合おうとする教師であるならば、一度や二度は必ずあるものである。そんなとき、原因を見出そうとすると、他者の存在や自己の無能さに帰属させることが比較的容易におこる。そこには運命論や決定論の落とし穴が口を大きく開けて待っている。しかし、他者を非難すること、自分に見切りをつけることで、いつまでたっても、身に纏わりつく不自由さから抜け出すことはできないのだろう。

ところで、人が頑張るときは、ややもすると自分のやっていることが一本調子になっていたり、他者を配慮しているとの思い込みが逆に独りよがりをもたらしていたり、さらに、他者の活動が愚策で無意味に思えてきたりするものである。そんなとき、自分を対象化したり、相対化したりすることができればよいのだが、これが至極難しい。なにせ、頑張っているときは一途に気張っているときだからである。

ラウンドテーブルは、参加者が自分の実践を問い、考え、語り、他者に受け止めてもらって返してもらう機会である。参加者は他者が受け止めて返してくれることで、自分のものの考え方や置かれた状況から幾分距離をとることができる。それによって、自分を縛っていた固定観念や役割や常識から解放される快感を味わったことのある方が多いのではないか。ラウンドテーブルには、運命論や決定論をも粉碎し、パッと霧が晴れたような自由を感じる瞬間がやってくることがある。

人は気張ることで成長するが、同時に、気張る中で不自由さを身に纏う生き物である。時々、纏いを洗濯したり衣替えをしたりしないと、自分の作り出した魑魅魍魎に押しつぶされかねない。ラウンドテーブルが病みつきのなるのは、呪縛を解き放つ解放感ではないか。不思議なことに、自分を束縛する原因の多くは、他者の存在である。そして、その束縛から解き放してくれるのも他者である。詮ずるところ、人は人の中でしか生きていくことはできず、できることは、互いにポジティブに成長しあえる関係の在り方を検討することなのだろう。ラウンドテーブルは、そんな関係の在り方を模索し続けている。

ところで、ラウンドテーブルに参加すれば、誰もが解き離れて自由になれるかという点、そうでもない。一定の心構えが必要であり、この心構えのない人の参加はお断りしなければならない。いささか失礼ではあるが、お断りしたい人のリストを挙げてみよう。

まずは、自分の実践報告を済ましたら帰る人。ラウンドテーブルは、実践を傾聴し、語り合うことが目的である。発表が目的なのではない。これでは発表の業務を果たしただけであって、自分を解き放つ自由を味わうことにはつながらない。情報伝達を旨とする悪しき研究発表の形式が学校文化にまん延している証なのかもしれない。

次に、自己の実践の正当性（優秀性）を確認したくて、他者の実践の問題点を見つけて非難する人。教師の仕事は、子どもの思いや思考の文脈を読み取ることから始まる。教師は、子どもの思いや思考を筋立てて、その子どもの願いのより良い実現に向けて、どんな支援ができるか研究する人である。ラウンドテーブルにあっても、実践報告者の意図を読み取り、報告者の意図を共有しようとするところからしか始まらない。また、実践の優秀性の確認の仕方も間違っている。優れた実践論文とは、その論文を読んだとき、読み手の中に類似した事例を想起させ、自分の実践を振り返ることが自然とうまれ、実践経験の再構築を促してくれる論文のことである。そこがいわゆる法則定立科学が求める「科学論文」と異なる点である。専門職の育成の世界、あるいは、教育のような相互主観性の世界に似非科学を持ち込むことの限界を広く知らしめる努力を、私たち当事者が怠ってきたせいである。

3つ目に、自分の思いを語らない人。時々、1時間程度の実践記録を持ってきて、好きに意見を言ってくれと居直る方がいる。参加者が実践に共感したくとも、報告者の意図が分からなければ取り付きよ

うがないのである。福井大学では長期の実践報告の作成を心がけている。それは、日々の実践をつなげて語るときの物語を大切にしているからである。実践をつなげて物語ろうとすると、実践者の教育観・価値観・子ども観などと対峙しなければならなくなり、実践の知識や技法レベルの討議から離れて、自分の中の〇〇観に潜む固定観念や常識等の呪縛からの問い直しが起きやすいからである。

逆に、困るのは事例抜きに自分の思いのみを語る人。省察的实践者は、個別的で具体的で実際的な事例に対して、協働して省察する中で事例の中に誰とも共有できる普遍的な事柄を見出し、その事柄を再度自己の実践の文脈の中で意味づけし直す人のことである。思いのみを語られても、参加者は事例の中で報告者の思いを確かめることができず、自分の事例を想起することができないから共感することもできず、途方に暮れてしまうものである。

最後にファシリテータの難しさに触れておきたい。ラウンドテーブルでは、実践経験の豊かな方や、実践を相対化することに長けた方をお願いしている。しかし、この任務は極めて難しい。

実践経験豊かな人であればあるほど、報告者の事例の中に、類似した自己の経験が浮かび上がり、自己の経験の再構成をしたくなるものである。だから、気付いてみるとファシリテータの独り舞台になりかねない。ファシリテータが報告者に触発されて自己の経験の再構成をする姿を目撃することも、確かに参加者には役立つが、その場を共有する全員が自由(束縛からの解放)を味わえるようにしたいものである。

ラウンドテーブルは慌ただしい時期に開催されている。もっと落ち着く時期に開催すべきだとも思うが、この時期の開催がベストなのかもしれないとも思う。慌ただしいときほど束縛が大きく、参加者が自由を欲しているときだからである。自分を解き放つことができるか否かは、ひとえに本日の参加者の語りと傾聴にかかっている。健闘を祈ろう。

実践研究

福井ラウンドテーブル

spring sessions 2019

2/15(fri)

Pre-session 17:30-18:40

専門職学習コミュニティを培う
ラウンドテーブルの意味

2/16(sat) 11:30-17:40

Students' Poster Session 11:30-14:30 子どもたちが語る「私たちの学校・学び・未来」

orientation 13:00-13:10

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

A 学校:21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

- 協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出す -

B 教師①これからの地方国立大学の教員養成が進むべき方向性を問う

- 教師になりたい人が育つ世代継承生成サイクルを創る -

②学部-大学院を通じたこれからの教員養成を考える - 実践を聴き、夢を語る -

C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする

- 地域・学校のつながりを編み直す -

D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiums

session III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める forums

18:00-18:40 省察的実践学会準備会

2/17(sun) 8:20-14:00

Session IV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●2/17の session IVの参加についてのお願い=午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。

そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。

原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

2/15 (fri) 17:30-18:40 会場：教育系1号館 6階コラボレーションホール

Pre-session 専門職学習コミュニティを培う

ラウンドテーブルの意味

2/16 (sat) 13:00-17:40

学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

Zone A 学校

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

- 協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出す -

会場：教育系1号館 2階 大1講義室 / 1階 11, 12, 13 講義室

これまでZone Aでは、「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと、学校が持続発展していくための教師協働の在り方について議論を積み重ねてきました。今回の実践研究福井ラウンドテーブル2019 Spring Sessionsでは、「専門職の学び合うコミュニティ (Professional Learning Communities)」のビジョンにもとづき、「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」という新しくもあり核心的なテーマを打ち立て、学校が「専門職ネットワーク」と「学校ネットワーク」を編み込みながら、学び合う文化の生成と成熟を進めるための道しるべを参加者のみなさまと協働探究していきます。

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス <教育系1号館 2階 大1講義室>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア) <教育系1号館 1・2階 フロア>
福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <教育系1号館 2階 大1講義室>

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

<シンポジスト> 福井大学附属義務教育学校・副校長 牧田 秀昭 氏

埼玉県立豊岡高校・教諭 金子 奨 氏

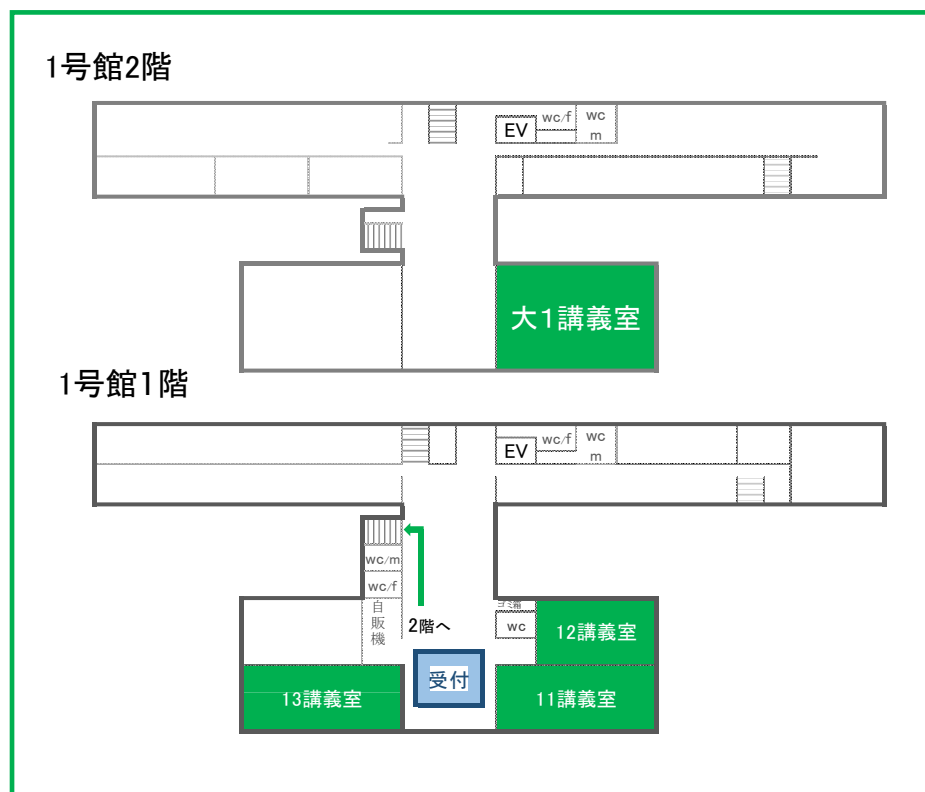
東京大学大学院教育学研究科・教授 秋田 喜代美 氏

<モデレーター> 福井大学連合教職大学院・准教授 木村 優 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <1号館1階 11, 12, 13 講義室>

協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出す

Session II の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。



Zone B 教師

21世紀の教師教育をイノベーションする

B1 これからの地方国立大学の教員養成が進むべき方向性を問う

- 教師になりたい人が育つ世代継承生成サイクルを創る -

会場：教育系1号館 6階 コラボレーションホール

大学入試の地域枠と高大接続／地域に密着した教育実習／5年制教員養成の構築／教員研修とリンクした教職大学院の教育課程／管理職希望者の全てが入学できる教職大学院。こうした教師の生涯発達課題を実現すべく地域社会と教職大学院が動き出した。

教育の振興なくして地方創生はありえない。地方が秘めている教育振興の仕組みこそ、知識基盤社会に立ち向かわなければならない日本が、世界に向けて発信できるかけがえのない世界戦略である。近年、日本型学校教育が注目されるが、その根底には地域と一体となって教師を育てる仕組みが息づいている。私たちは風化しつつある地域の教師教育の仕組みを活性化し、そこに秘められた子どもたちの Agencies を育む教師の有様、さらには、子どもと教師の Inter-agency を育む仕組みを顕在化させなければならない。

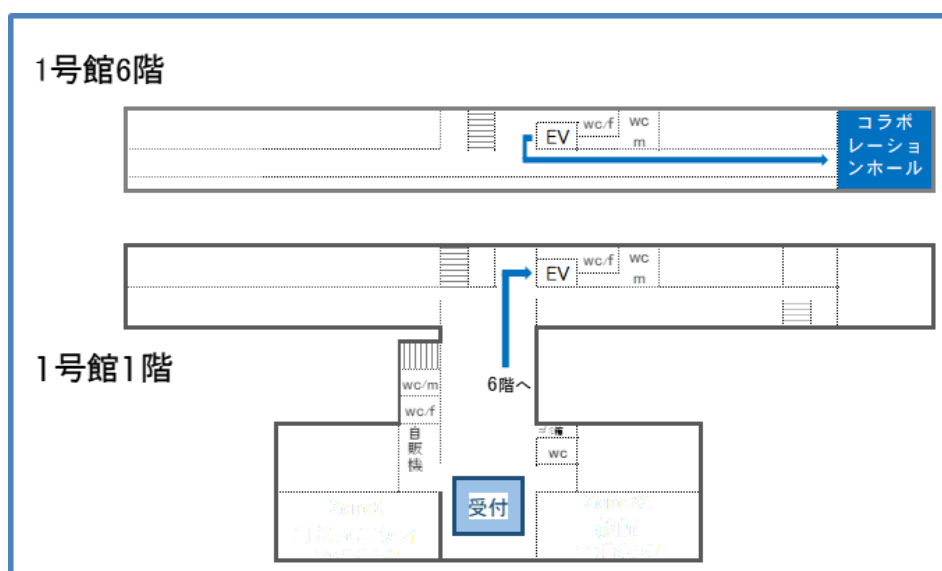
これらの課題を実現するには、何が必要なのか。教職大学院の現場、国の教育行政、地域社会の各立場から建設的な意見交換を実現する。

- Orientation** 13:00-13:10 ガイダンス<教育系1号館 6階 コラボレーションホール>
- Session I** 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア)<教育系1号館 1・2階フロア>
全国教職大学院、教員研修センター、教育委員会ほか
- Session II** 14:20-15:50 シンポジウム <教育系1号館 6階 コラボレーションホール>
これからの地方国立大学の教員養成が進むべき方向性を問う
(シンポジスト) 岡山大学大学院教育学研究科長 三村 香里 氏
文部科学省総合教育政策局教育人材政策課長 柳澤 好治 氏
福井県教育庁教育政策課長 片柳 成彬 氏
敦賀市教育長 上野 弘 氏
情報提供 福井大学連合教職大学院・研究科長 松木 健一 氏
(コーディネーター)
福井大学連合教職大学院客員教授(慶応大学・東京大学教授) 鈴木 寛 氏
- Session III** 16:00-17:40 フォーラム <教育系1号館6階 コラボレーションホール>
教師になりたい人が育つ世代継承生成サイクルを創る

Session II シンポジウムでの議論を受けて、参会者の皆様とともに協働チームで問いと議論を深めていきます。

話題提供

文部科学省総合教育政策局教育人材政策課教員養成企画室教職大学院係 東 尚平 氏
大阪体育大学准教授 岸田 正幸 氏 福井県教育総合研究所所長 牧野 行治 氏
福井県嶺南教育事務所所長 岸下 良幸 氏 若狭町教育長 玉井 喜廣 氏
福井県立若狭高等学校進路指導主事 澤村 文明 氏
福井県立敦賀高等学校進路指導主事 高橋 克弘 氏



B2 学部・大学院を通じたこれからの教員養成を考える

- 実践を聴き、夢を語る -

会場：教育系1号館 2階 コミュニティプラザ

これまで Zone B2 では、大学教員が自らの授業実践を語り合い、聴き合うことを通じ、これからの時代に求められる教員養成のあり方を模索してきました。その中で、学校現場等を活動の場とした多様な実践的活動の有り様とその成果、課題等が浮かび上がってきました。昨今、教員志望の学生に対する継続的な現場体験の充実・拡大が求められていますが、その実現と継承・発展を支えることには様々な困難が伴います。そこで、今回のラウンドテーブルでは、学校ボランティア、サービス・ラーニング、体験実習等の実践的な取り組みに焦点を当て、教員養成における体験的活動をいかに実現し、継承・発展させていくのかについて、互いの実践を交流し合いながら、参加者のみなさまと探究を深めていきたいと思います。

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス <教育系1号館 2階 コミュニティプラザ>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア) <教育系1号館 1・2階フロア>
福井県内外の教員養成大学

Session II 14:20-15:50 シンポジウム <教育系1号館2階 コミュニティプラザ>
学部・大学院を通じたこれからの教員養成を考える

「教員養成・研修統合型のシステム構築の展望と課題～大学の役割から考える～」

静岡大学 梅澤 収 氏

「教育問題に対応する実践的な力の育成を目指した『1000 時間体験学修』」

島根大学教育学部 下村 岳人 氏

<コーディネーター>

福井大学連合教職大学院 遠藤 貴広 氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <教育系1号館 2階 コミュニティプラザ>
実践を聴き、夢を語る

梅澤 収 氏 (静岡大学)

三品 陽平 氏 (愛知県立芸術大学)

田宮 縁 氏 (静岡大学)

宮島 新 氏 (信州大学教職大学院)

長谷川 哲也 氏 (静岡大学)

大畑 健二 氏 (信州大学教育学部附属長野小学校)

下村 岳人 氏 (島根大学)

小田切 亮 氏 (信州大学教育学部附属長野小学校)

小野瀬 善行 氏 (宇都宮大学)

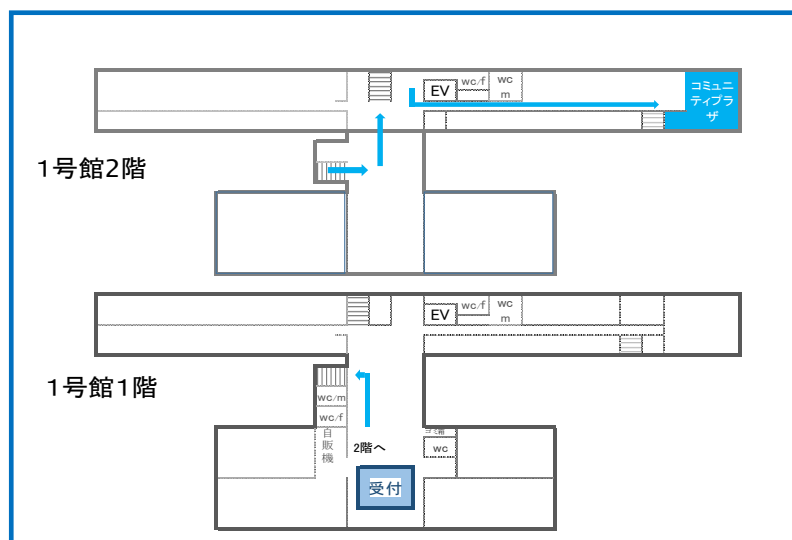
竹内 克紘 氏 (信州大学教育学部附属長野小学校)

肥田 武 氏 (一宮研伸大学)

白井 敬 氏 (信州大学教育学部附属長野小学校)

福井大学

小グループ形式での実践交流を行ないます。



Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

- 地域・学校のつながりを編み直す -

会場： 共用講義棟 (K310 K320 K330)

これまで Zone C では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」という大きなテーマのもと、そうした展開を支える広報や記録、コミュニティを支える実践者の力量形成といったサブテーマで多角的に検討してきました。今回は、地域のコミュニティにおける学校にも焦点を当て、「地域とともにある学校」についても考えていきたいと思っております。少子化や情報化といった社会の変化のなかで、これまでの地域コミュニティの在り方にも変容が生じており、改めて今「社会に開かれた教育課程」や「学校と地域の連携」といったことが教育改革でも重要課題になっています。豊かな地域コミュニティを醸成するために、地域や学校における実践者の方がどのようにそのつながりを編み直しているのか、それぞれの立場からの実践報告を共有するなかで一緒に考えていきたいと思っています。

Orientation	13:00-13:10 ガイダンス	<教育系 1 号館 1 階 13 講義室>
Session I	13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア) 福井市及び勝山市の公民館・福井大学探求ネットワーク・たかとの郷づくり協議会	<教育系 1 号館 1・2 階フロア>
Session II	14:20-15:50 シンポジウム 地域・学校のつながりを編み直す	<共用講義棟 K310>

<シンポジスト>

福井市一乗公民館・主事 松田 芳味 氏

坂井市立丸岡南中学校・教諭 奥村 弘美 氏

<コーディネーター>

福井市生涯学習室 岩佐 誠 氏

福井大学連合教職大学院 半原 芳子 氏

Session III	16:00-17:40 フォーラム 地域における多様な実践から学び合う	<共用講義棟 K320 / K330 / K420 / K430>
--------------------	--	-----------------------------------

Session II シンポジウムでの話題提供を受け、小グループで実践の交流を行います



Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

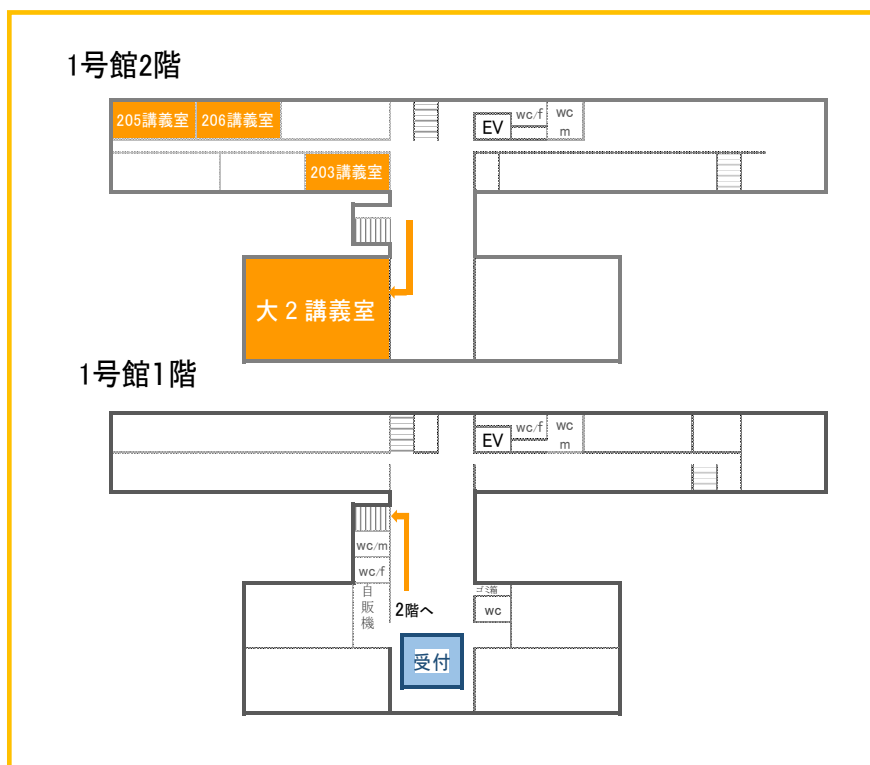
会場：教育系1号館 2階 大2講義室 / 2階 203・205・206講義室

これまでZoneDでは、「子どもと教師の学びを支えるために保育研究・授業研究をいかに組織するか」というテーマで、特に探究的な学習を支えるためにどのように保育研究・授業研究を組織していくといいのか、考えてきました。

今回は、このテーマを掘り下げて考えていく視点として、「授業研究の文化をいかに創っていくか」に焦点を当てます。保育研究・授業研究は、とすると公開保育や公開授業に向けて、準備を厚く重ね、それが終わると研究も終了という、いわば打ち上げ花火のような形式的な授業研究になってしまう危険があるものです。真に子どもたちの探究を深めていくには、1サイクルの保育研究・授業研究ではなく、教師たちが持続的に協働で探究していく保育研究・授業研究の文化が不可欠です。そのためには、どのように研究のリズムを作り、どのように教師の協働探究を組織し、どのように基盤となる実践記録を編成していくとよいのでしょうか。

シンポジウムでは、こうした授業研究の文化を創ってきた小・中学校の実践報告に加え、アフリカ・マラウイ国において新たに授業研究の文化を創ろうとしている取組について実践報告をいただきます。

シンポジウムで出てきた問題提起を踏まえて、フォーラムでは、保幼小・中高・特別支援という3領域に分かれ、参加者がそれぞれの校種や領域で具体的に実践を捉え直していきます。その手がかりとなるよう、校種ごとに話題提供をしていただきます。授業研究の文化を創っていく上では、学習のありかたについて転換を図ることが必要であり、文化を築くまでには時間のかかるものでもあります。そうした苦労も含めて、参加者同士で率直に語り合い、展望を探っていければと思います。



Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

<教育系1号館 2階 大2講義室>

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション(ナレッジフェア)

<教育系1号館 1・2階フロア>

福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

Session II 14:20-15:50 シンポジウム

<教育系1号館 2階 大2講義室>

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

<シンポジスト>

マラウイ教育科学技術省教員教育開発局

アルフレッド・カモド氏

福井市森田小学校・教諭

板垣 英一氏

信州大学教育学部附属松本中学校・副校長

宮下 哲氏

<コーディネーター>

福井大学連合教職大学院

高阪 将人氏

Session III 16:00-17:40 フォーラム <教育系 1 号館 2 階 203・205・206 講義室>

多様な授業研究・保育研究から学び合う

Session II での話題提供と校種別の実践報告を受け、小グループで実践の交流を行います。

- | | |
|---------------------|--|
| A. 「保幼小の実践に学び合う」 | 信州大学教育学部附属松本小学校
福井県高浜町立保育所実践研究グループぴっか |
| B. 「中高の実践に学び合う」 | カリタス女子中学高等学校
福井市社中学校 |
| C. 「特別支援教育の実践に学び合う」 | 福井県立福井南高等学校 |

18:00-18:40

会場： 教育系 1 号館 6 階 コラボレーションホール

省察的実践学会 発足に向けた第 5 回準備会

個々のコミュニティ・分野・領域を超え、実践の知を通わせ、結んでいく。そのための新しい実践研究の交流の場を拓く。そうした新しいコミュニケーションの場を目指して、2016 年 6 月に〈省察的実践学会〉の呼びかけをはじめ、以来、多くの方に賛同いただき、さまざまなコミュニティ・分野・領域から発起人・会員が集まりつつあります。2017 年 2 月・6 月、2018 年 2 月・6 月のラウンドテーブルにおいて準備会を行い、学会の趣旨を共有しました。今回、正式な発足に向けて意見交換をするセッションを持ちたいと思います。関心をお持ちの方はぜひご参加ください。

2/17

(sun) 8:20-14:00

SessionIV 実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

8:20 1号館1階ロビーで受付をお願いいたします。参加するグループを確認してください。

（グループは、多様なメンバーが交流できるよう、運営委員会で設定いたします。）

- | | |
|--------|-------------|
| ① はじめに | 8:30-8:40 |
| ② 自己紹介 | 8:40-9:00 |
| ③ 報告Ⅰ | 9:00-10:40 |
| ④ 報告Ⅱ | 10:40-11:40 |
| ⑤ 報告Ⅲ | 12:20-14:00 |

ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたと思います。

グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。

報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等はいりません。

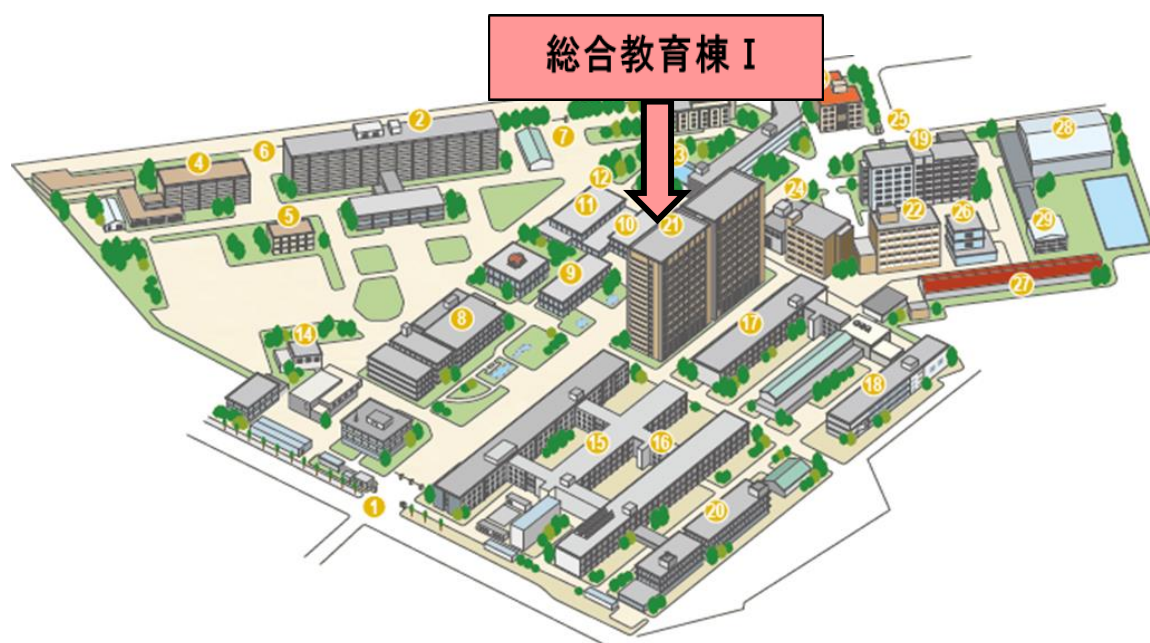
Students' Poster Session

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来へのイノベーション』

実践研究福井ラウンドテーブル 2019 Spring Sessions、2月16日（土）Students' Poster Session「子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来へのイノベーション』」のご案内です。これから、21世紀半ばの未来を創っていく小学生・中学生・高校生が今、この時の教育の中で何を学び、いかに学び、そして未来を切り拓いていくための力と心をいかに培っているのかを、「私たちの学校・学び・未来」というテーマで子どもたち自身の言葉で表現していただきます。

2月16日（土） 8:30-9:30

会場：総合教育棟 I 13階 大会議室



ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の

展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳沢 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 ,2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2019.2

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり，実践を聴き合う会ではなかった）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働（第 1 回）
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者 20 数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的实践を生み出す 学び合う組織を編む）（第 3 回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第 4 回）
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第 5 回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第 6 回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル 2004（第 7 回）
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 8 回 参加者 100 名超）
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 9 回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ（第 10 回）
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006（第 11 回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 12 回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 13 回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 14 回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 15 回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 16 回）稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 17 回）5 つの領域：専門職として学び合うコミュニティ
（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 18 回参加者 300 名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 19 回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011（第 20 回 参加者 300 名を超える）門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2011（第 21 回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions（第 22 回）（名称を変更する）

- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions (第 23 回) 参加者 450 名を超える
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回) (名称を変更する)
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第 24 回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第 25 回)
11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013 winter sessions (明治大学)
2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回) 参加者 550 名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第 27 回)
11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム, 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第 28 回) 参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第 29 回)
11.21 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
12.19 教育実践福島ラウンドテーブル, 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム,
2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第 30 回) 参加者 800 名を超える
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第 31 回) 参加者総数 547 名
7.8 記念講演&シンポジウム (和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)
11.12 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
- 2017.2.17-19 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第 32 回) 参加者 800 名を超える
特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催. 省察実践学会の発足
- 2017.6.23-25 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第 33 回) 参加者総数 566 名
10.14 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園), 10.15-21 マラウイラウンドテーブル,
11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学
12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2018.2.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions (第 34 回) 参加者総数 627 名
- 2018.6.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions (第 35 回) 参加者総数 476 名
10.20 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園), 10.23 マラウイラウンドテーブル,
11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良
12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学
12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル (東京学芸大学)
2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘い

ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して



福井大学連合教職大学院准教授・木村優

新しいミレニアムが幕をあげたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している**実践研究福井ラウンドテーブル**を生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして**実践コミュニティ**¹を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びていっています。ラウンドテーブルの創世記には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学（院）におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チー

ムとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代（Society5.0）、超 AI 時代、VUCA ワールド²等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする**機構**が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで**変化に向けた挑戦**が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21 世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための**省察的機構**³としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ（革新的）なローカル・コミュニティが集合する大きなコミュニティの「**坩堝（るつぼ）**」なのです。

¹ あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと（ウェンガー・マクダーモット・スナイダー、2002）。

² 現代社会の特徴を表す 4 つの言葉：Volatility（不安定）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字をとった造語。

³ コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン、2017）。

もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない**新しい知の創造**であり、**新しいかわりの現れ**です。この新しい「知」や「かわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション（解）」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、**分散型コミュニティ**のデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる

分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、**教育改革のグローバル・コミュニティ**を築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院と JICA との連携を基盤として、アフリカのマラウィでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

Archive

—アーカイブ—

ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.84(16.05.14) からご紹介いたします。

Newsletter No.84 (16.05.14) より

久しぶりの福井で自身をふり返る

カリタス小学校 寺田 進

十数年ぶりに福井大学を訪れた。前に訪れたのは真夏。本校（神奈川・カリタス小学校）が『総合教育活動』をスタートさせるにあたり、長野・伊那小学校からのご縁で松木先生にお会いし、そのご指導を仰ぐために同僚達と訪れたときだ。福井駅の改札を出ると松木先生が待っていてくださり、一緒にゲストハウスへ。のんびりする間もなく、すぐに研究会（検討会）が始まったのを覚えている。1泊2日という短期間だったが、中身の濃い、暑い（熱い）福井だった。

それ以来の福井。ラウンドテーブルの参加は初めてだ。あの十数年前と季節は違うが、やはり福井は熱かった。福井大学を中心として、「教育」を語る先生方の熱が高いことを感じた。

1日目の午後は Zone A に参加した。テーマは「校種を超えて教育を協働する」。幼保・小・中・高・大、さらに地域がいかに連携して子ども達の教育を協働するか。実践報告や語り合いの中で、「さて自分のところでは」と考える機会を頂けたと思う。

実践報告では和歌山県立桐蔭中・高等学校の取り組みと、長崎大学教育学部附属中学校の取り組みを伺うことができた。それぞれの学校の実践から学ばせて頂けることはたくさんあったが、どちらにも共通していることは「これでいいのだろうか？」と現状に疑問をもつことと、その疑問を解決するにあたっては「構築の苦しみ」があるということかもしれない。

よく「現状維持は退化に等しい」と言われる。日々、教育環境は変化している。変化している中で現状維持がよいはずもなく、私たちは進化・発展しなければならない。

そんな報告を受けて、自身ははたしてどうなのか？とふり返った。私の勤務する学園は幼稚園から高等学校まであるカトリックの一環校である。キリスト教という宗教を背景とした学園全体の理念は、共有されている。しかし、具体的な教育内容についてどうか？幼稚園のモンテッソーリ教育、小学校の総合教育活動、中高の進学実績を高める教育。こう眺めると、統一感、連携はなかなか見えてこない。福井周辺の公立学校の中でも、その連携が模索されているところがあるのを聞くと、本来「学園」として1つになりやすいはずのところ、それが機能できていないことにもっと問題意識をもたなければならないと感じた。

幸い、昨年度から松木先生を学園講師としてお迎えし、今、その連携を構築していこうという雰囲気が生まれつつある。まだまだ、校種間の文化の違いや考え方の違いが障害になることもある。でも、それを構築していく苦しみを経ないと新しいものは生み出されない。そんな思いを、福井での熱い先生方との語りで感じさせられた。

「協働」に実践の裏付けを

北海道札幌白陵高等学校 植井 真

一日、いや人生の大半の時間を学校の中で過ごす教師にとって、目の前の子どもの向こうに彼らが生きていく社会を想像することは、実は思いのほか難

しい。大抵の教師は学校の囚われ人で、進学、就職、転勤などの節目はあるのだけれど、基本的に学校の文化の中で自らの役割が変化するに過ぎない。かく

いう自分がまさにそれであり、塾・予備校で働いていた時期があるものの、どっぷりと学校の当たり前に染まっているから子どもが生きていく社会については簡単に想像することが出来ないのだ。

当然、様々な情報でそれらを知っていることは知っているのだけれど、「生きる力」が真に意味するところを実感として有しているのかと問われれば、甚だ抛り所がない。そういう教師である自分が「地域」に関心を持ち、水産科や家庭科の専門高校において教科や部活動で地域連携する中で「協働」という概念に出会った。私にとっては「連携」は臨時的にそれぞれの目的を達成するために貢献し合う活動であるのに対し、「協働」は恒常的に目的を共有して互いがコミュニケーションを取りながら貢献し合う活動である、と捉えている。そういう「協働」はようやく少しずつ地域の中で取られるようになってきているものの、学校の世界では目の前の日々の実践に埋没して言葉だけが上滑りしているように感じる。果たして学校は「連携」さえできているのだろうか。

今回のセッションでは活発な議論がそれぞれの実践を踏まえて行われたが、学校の校種を超えた協働

の在り方について、その輪郭を掴む状況にはまだ至っていないように感じた。教師の実践はあくまでも今、が中心になっているけれど、時制が点ではなくて過去から未来に流れる線として捉えられないと、学校が校種を超えて協働する状況にはなり得ない。そこに至るにはラウンドテーブルという「仕掛け」自体が、それぞれの省察を通じて繋ぎ合う場になるかもしれない。その可能性は大いに感じた。

教育に関する言説はいとも容易く語られることが多いけれども、その言葉に実践の裏付けが有るか無いかで全く異なる質量となる。教育実践者として私たちが取りうる態度としては、言葉が示す理念に相応しい実践を苦しい試行錯誤の中から編み出していくことではないだろうか。「校種を超えた協働」が、ある一定の共通理解を得られるようになるまでには相当の生みの苦しみを経ることになるだろうが、福井の地に集った様々な知の実践者がこの場を軸にして共鳴すれば、それは意外と早く実現するのではないかと感じた一日であった。

どんな人間を育てるか、考えよう

小・中・高の協働について考えたこと

板橋区立赤塚第二中学校 森田 直実

今回、福井ラウンドテーブルに参加するのは2回目である。昨年度の春のラウンドに来て以来、1年ぶりの参加となった。毎回、来て思うことは「一緒に頑張っている仲間が日本全国にいる」ということである。日本の子どもたちのために、日々研究をしている仲間がいるということを感じ強く感じる。そして、「負けてなるものか」という気持ちも強くなる。今年の春のラウンドテーブルでも、もっと子どもたちに力をつけていきたい、日本をよい国にしていくためには何が必要なのかということを考えるよい機会となった。

Session II では、中高一貫校の和歌山県立桐蔭中・高校の岸田先生、長崎大附属中の鶴田先生からの発表があった。岸田先生は中学と高校の連携を、鶴田先生は小学校と中学校の連携について、とても参考になる発表があった。中学と高校の連携では、キャリア教育を軸に、「これから先の人生をどのように生き抜いていくのか」という自己で進路を切り拓くため

に必要な教育をしているとのことで、義務教育を卒業し、新たなスタートを切る中学・高校という時期にはふさわしいものだと感じた。小学校と中学校の連携では、小学校との連携を始める難しさをあらためて感じた。小学校と中学校と、授業の1単位時間が違うことや、放課後の時間の生活が違うために、研究の時間がもちにくい。さらに、中学校では進路などがあり、小学校とは行事の流れがちがうことなど、たくさんの困難がある。しかし、長崎附属中はその困難を克服し、研究を進めることができている。この実践からは学ばなければならないと感じた。赤塚第二中学校は、同じ敷地内に小学校が設置されている。中学校からも小学生が遊ぶところや体育の授業をする様子が見られる。近くにあるのに、小学校のことを知っているか、小学校の先生のことを知っているかと問われても、おそらく自分は適当なことしか答えられないだろう。小学校と中学校は違うものだという意識が、どこか私の中にあるからだと感じる。困難を少しず

つ、無理なく解消し、小学校との連携を深めていくことが必要だと痛感した。

SessionⅢでは、小グループでの実践を語り合うことができた。私のいたグループでは地域は違えども、小学校、中学校、高校、大学と4つの校種の教員がおり、それぞれの立場からの連携について語り合い、考えることができた。校種ごとに抱える問題は異なっている。その抱える問題が、校種の連携をスムーズ

ズに行えない一つの原因ではないかと考えた。また、質問にも出てきた「どのような人間に育てたいかというグランドデザイン」ということも話題に上った。どのような人間を育てるか明確な目標を作ることが、これからの教育には必要なことになるのではないかと感じた。教科も含め、どのような人間を育てていくか、現場から考えていきたい。

学校を学び合う共同体に

横浜市教育委員会事務局 安富 江理

教師の学びは、まさに「実践し、省察する」ことによってなされる。Zone Bは、「育成指標は教員研修を変えられるのか」というサブテーマが設定されていた。教員の育成には、「育成指標」を目標設定に活用し、実践したことをラウンドテーブルのような、「コミュニティ」の中での協議によって省察し、学び合うことが必要である。教員研修も目標を設定し、実践し、省察し、次の目標を設定するといった学びのサイクルの中で営まれることが大切である。ポスターセッションでは、横浜市の教員研修について、発表させていただいた。「教員のキャリアステージに応じた人材育成指標」に基づく研修では、目標を設定し「実践し、省察する」ことを基本にしている。組織内の役割でキャリアステージを分けていること、校外研修と校内研修を連動させ、OJTが進むように仕掛けていること、大学との連携・協働などをお伝えした。発表させていただくことによって、研修の方針や考え方を見直し、整理することができた。また、セッションによって取り組んでいることの価値や課題に気付くことにもなり、感謝している。

管理職には、地域、大学、専門家などの様々な力を借りて、「チーム学校」としてマネジメントを進めて

いくことが求められている。このラウンドテーブルには、様々な立場の方が集まり、セッションを行っている。その中で、発表者の実践が価値づけられている。さらに、協議に参加している誰もが、それぞれの立場や視点から発表者の実践を聞くことによって、自分の経験を振り返る機会ともなっている。子供たちのポスターセッションは、どの姿も素晴らしかった。中でも、自分の学校に誇りをもち、校舎・環境を十分に生かして学んでいることを伝える中学生の姿に感動した。オープンスペースの学校は、教員が異動してしまうとそのよさが伝わらなくなってしまうことがある。しかし、この中学校は、校舎に対するマインドが生徒間で引き継がれているので、教職員と協働して学びに取り組むことができている。さらに、研究テーマも共有されているので、学び合い・高め合いなど授業で大切にしたいことや省察の視点が明確になっている。子供も主体者として、共に学校づくりをしていることを学ばせていただいた。

様々な立場の方に学校経営に参画していただき、学校が学び合う共同体となることの意味や価値を、改めて感じた貴重な2日間であった。

たくさんの「気づき」を得られた福井ラウンドテーブル

目白大学大学院 大宮 明日香

今回で2度目の福井ラウンドテーブル。前回の6月に引き続きで参加してしまっても大丈夫なのかどうかという不安がありましたが、いざ始まると、その心配はすぐにはなくなりました。日々の業務に追われ

てしまい、自身の実践を振り返って整理することはなかなかできないのですが、報告準備のためにじっくりと省察することができました。様々なバックグラウンドを持つ参加者の方々と出会い、交流するこ

とができ、多くの学びがある非常に充実した 2 日間でした。

Zone C1 のポスターセッション、シンポジウムでは、「持続可能なコミュニティ」について若い世代と地域を結ぶということで、地域のために、これからの若者たちのために、公民館や青年団の方々、福井大学探求ネットワークの学生たちが取り組んでいることを自分自身の現状と比べながらお話を聞かせていただきました。素直に、様々な工夫を凝らして試行錯誤しながら活動していることの発表に、大変感銘を受けました。また、福井市では 1 小学校区ごとに 1 公民館が設置されているということに驚きました。なぜならば、私が住んでいるところや職場の地域では、小学校区ごとに公民館があるという話は、これまで聞いたことがありません。学校と地域が連携して取り組むことや、その繋がりが希薄になる中、首都圏と比べて、福井は学校と地域が密につながっているのだと感じました。

私は大学院で自身の研究に取り組んでいる傍ら、平日は社会人として職業を有し、日本へ留学に来る外国人留学生に日本語を教えています。1 日目のクロスセッション、また 2 日目の報告は、前回 6 月のラウンドテーブルに参加させていただいた際に得たも

のをきっかけに行った実践を報告いたしました。夢や目標を持って自身の勉強だけではなく、日本での就職や定住を考えている留学生もいれば、なんとなく…で日本へ来てしまった留学生もいます。20 代前後の若い外国人留学生が日本へ来て、外国での勉強や生活をどのように指導し、支えていくか。同じテーブルのメンバーに真摯に聴いていただきました。地域、業種、分野の異なる方々との語り合いで、私自身も日本語教育の分野もまだまだ伸びしろがあるなど痛感し、今回のラウンドテーブルを通して初めて気づいたことも多々ありました。また、他のメンバーの貴重なお話をたくさん伺うことができ、大変有意義な時間を過ごす事ができました。

各々が取り組んでいる内容は一見、違うように見えますが、課題への取り組みであるとか、またはそのぶつかりや戸惑い、苦しみ、課題を達成出来たときの喜びなど、根底に流れる思いは共通するようです。参加の機会をいただけて、新たな共同探究ができたことを大変光栄に思っております。そして、たくさんの刺激と学び、また次への活力と新たな課題をお土産にももらいました。またチャンスがあれば、また福井ラウンドテーブルにぜひ参加したいです。

「つながる、広がる、続ける」

国高小学校 P T A 坂下 淳子

今回初めて、実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただきました。シンポジウムでは、市立札幌大通高等学校の平野先生が定時制高校と地域との関わりについて実践している現状を、安居の里を守る会の重森さんが体験学習を中心とした子どもの地域活動について発表されました。高等学校と小学校、都市部と地方、教員と地域住民という全く違う立場からのお話でしたが、共通することは、子どもたちのために熱心に活動されているということと、その活動をどう継続していくかが難しく、学校と地域との連携が大切だということが分かりました。

グループセッションでは、学校、公民館、行政関係者や P T A、学生など様々な立場の参加者 8 0 人ほどが 1 4 のグループに分かれて、実践報告を聞きあい、感想や意見を述べあいました。私の参加したグル

ープでは、公民館の方が、半年ほど前から始めた「公民館クラブ」活動の様子や苦勞した点について報告されました。小学校のクラブ活動に地域住民の方を講師に招き、得意分野を子どもたちに教えていただくという企画は、子ども・学校・公民館・地域が一つにつながり、とても魅力的だと思いました。見守り隊や読み聞かせの活動も広がっていますが、地域の方が先生として学校で子どもたちと交流することで、地域と学校の距離が近づき、また公民館が関わることで子どもたちが公民館に遊びに来るようになったそうです。学校と地域とのコーディネートや活動を継続させることの難しさなどについてグループ内からも意見が出され、とても参考になりました。また、福井大学教育地域科学部の学生による「もぐもぐブロック活動」報告では、小学校 3 年生から高校 2 年生

までの23人と料理を通して学びを展開している活動が紹介されました。地域も学年も経験も違う子どもたちの仲をいかに深めるか、一人一人の役割を意識して調理できるか等を目標に活動してきました。子どもたちが初期のころと比べ大きく成長した姿や楽しそうな笑顔を見ることができ、スタッフも共に学び、成長できたことを誇りに思っているそうです。グループからは、地元の伝統料理を伝承する活動をしている地域があるので、公民館等を通じて紹介してもらいたいのでは、という意見がありました。今回のグループセッションが、子どもたちと学校のつながりを地域へと広げるきっかけになることを期待したいです。

国高小学校PTAでは、本年度「国高っ子の夏祭り」を初めて開催しました。PTAを中心としたゲームコーナー、自治振興会の昔遊びコーナー、スポーツ少年団の体験コーナー、仁愛大学のよさこい、地元企業による働く車コーナーと飲食コーナー、巨大スクリーンでの映画鑑賞に1,000人を超える人たちが集まりました。祭りというイベントを通して、共感と協力の輪が広がり、学校と地域がより深くつながることができました。大切なのは、このつながりを継続することだと思います。シンポジストの方も活動を5年は続けなければ、成果は出ないと話されていました。子どもたちの成長を願ってつながったこの活動をこれからも広げていきたいと、思いを新たにしました。

出会いと学び

奈良県生駒市立光明中学校 篠原 嶺

授業中、下を向き疲れきった生徒を見て、このままではまずいと気付く。どうすれば、生徒の顔が上がるのかと考える。しかし、具体的な手立てが浮かばない。いやな汗が流れ出す。授業を終えて職員室に戻り、深いため息をつく。教師になって3年目の私は、このような場面が何度もあった。

まれに生徒と一体になったように感じ、生徒から「もう授業終わりか!」「今日は早く感じたな」と言われる授業がある。そんな時は上手くいったと充実した気持ちになる。どうすれば、授業が上手になるのか。生徒が面白く楽しく学べる授業を創るためには、なにが必要なのか。教師として、どのようなことを学ばなければいけないのか。福井大学へと向かった。

1日目のZone Dで、特に惹かれたのは福井市至民中学校 竹林史恵先生の発表だった。至民中学校の取り組みを一言であらわすと「言語化」である。至民中学校では参観記録を書き、授業研究をされている。書くときの観点を示し、それぞれの教師が参観記録を書く。しかし、同じ観点で記録をとっているにもかかわらず、「一人の生徒に着目して書いたもの」「自分の授業に照らし合わせて書いたもの」「提案授業から、自分の課題を見つけて書いたもの」など書き方は多様である。おそらく記録者自身の問題意識が、あらわれているのではないだろうか。書くことで参観者は、自分の問題意識に気付く(あるいは明確化し)、自身の授業と向き合っていく。一方で授業者は多くの参観記録を読むことで、

省察の目が養われ、授業の見方が変わってくる。なにより、同僚とともに学ぶことで意識が高まり、励みになる。

このような授業研究を行っている至民中学校では、普段の実践などについて同僚と語りやすい雰囲気があるのだろう。いや、そういった知的な学校文化を創ってこられたのだろう。こんなことを考えていると竹林先生が驚きの一言を放った。

「至民中学校では学校全体で実践記録を書いています。」

掲げられた冊子は分厚く、300ページは超えているだろう。シンポジウムが終わると、竹林先生に話しかけた。

「実践記録を読ませて下さい。」

「教室を出たところにあるので、よければ持って帰って下さい。」

福井県内の先生方と少し話してから教室を出た。冊子を貰おうとすると、なんと残っていなかった。肩を落としていると竹林先生が声をかけてくださり、訳を話した。

「先生のところへ冊子を送ります。」

なんと優しい人なのか。お礼を述べ、その場を後にした。

2日目のラウンドテーブルが始まった。同じテーブルには至民中学校 鈴木三千弥先生がおられた。ラウンドテーブルのメンバーを組んで下さった福井大学の方に感謝した。初対面であったが、至民中学校の発表を聞いた感想、実践記録の到着を楽しみに

していることを伝えた。

昼の休憩が終わる頃、鈴木先生が少し照れたような様子で話された。

「家にある実践記録を持ってきてもらったので、荷物にならなければどうぞ。」

まさにシンポジウムで紹介されていたものである。初対面の人に、ここまで丁寧に優しくしてくださる鈴木先生に感動するとともに、至民中学校の教師が持つ同僚への温かさにふれた気がした。

午後は私が報告した。国語の授業で取り組んだことを話したが、まったく上手く話せなかった。相手にちゃんと伝わっているのか。この取り組みに意味はないのではないのか。話している最中に不安が広がり、いやな汗をかいていた。一通りの報告を終えて、こんな報告で話し合いになるのかとうつむいていた。するとテーブルのメンバーが子どもたちの持

つ言葉・表現力、学習意欲を引き出すことなどについてのそれぞれの実践と照らし合わせながら語り合った。

福井大学を後にし、家へ帰ってきてから至民中学校の実践記録を読んだ。すると、無性に書きたくなった。国語科・図書館教育・教育相談・部活動など、テーマは多様である。しかし、これらの根底で共通していることがある。それは普段から悩み、不安に感じていることである。言語化することで、その悩みや不安が形になり、自身の見方・考え方が見えてくる。見えることで、取り組み方が変わってくる。このような過程を経て、教師として成長していくのではないだろうか。

おそらく次の福井ラウンドテーブルにも参加するだろう。今度は、私自身の実践記録を携えて。

ラウンドテーブルに参加して

福井大学教育学部附属特別支援学校 大坂 真喜子

ラウンドテーブルへの参加は昨年に続いて2回目です。ポスター発表では日本全国各地のお国言葉があちらこちらから聞こえてきます。「福井大学すごい、こんな大きな大会、すばらしい」と言う会話を耳にしたときには、福井大学出身の私はとてもうれしくなりました。

Zone Dでは、「教師の資本を授業研究によっていかに培うのか」というテーマで報告と討議がありました。

Session IIでの福井市至民中学校と福井市中学校の社会科授業研究委員会の報告は、授業を分析し、研究を重ねて究極の授業を創りあげようと努力を重ねていることが伝わってきました。私も日々の自分の授業を振り返り次の授業に生かせるように努力をしたいと反省しました。やっぱり授業は教師の命ですね。県外からの派遣教員の方々の発表では、福井県教育レベルの高さがよく分かりました。私の後ろの席の方が、「やっぱり福井はすごい…」などの会話をしていて、思わず自慢したい気持ちになりました。どの発表も、もっと詳しく聞きたかったのですが、質問などをする時間がなく、話を深めることができなかったのがとても残念でした。

Session IIIでは、福井ブロック授業研究会の報告がありました。日頃の授業についての悩みや課題などを共有し、話し合い、実践して前向きに授業に取り組んでいて、福井地区の英語教員全員が協働・連携して福井地区の生徒を育てているそうです。福井地区の生徒はこのような英語の授業が受けられてとてもラッキーです。さすが、学力No.1です。

2つめの報告は、福井大学美術科の大学院生と福井大学附属特別支援学校の協働実践研究プロジェクト「鑑賞学習開発『特別支援学校での壁画制作実践報告』」でした。鑑賞学習開発とは、「つくることに（表現）」に偏らずに「みること（鑑賞）」も大切にしてお互いを関連づけながら授業を構成していく取組です。院生2人は附属特別支援学校で教育実習をした経験から、スムーズに事前調査を進めることができ、支援計画や活動内容を中学部教員と協働・連携しながら練り上げていきました。完成した壁画は校門横の壁に恒久展示することに決まりました。今回の発表のなかで、私の担任する中3年、Aさん(女子)の事例がありました。Aさんは、壁画制作の活動に回を重ねる毎に楽しそうに参加するようになりました。手先の細かい操作が苦手な空間認知力の弱い彼女がどうしてこの活動が好きなのかを知

りたくて、毎回授業の様子を観察していました。私が考えるよい授業とは、以下のとおりです。

- ①何をしたらよいのかがすぐに分かる授業（説明は少なく、視覚支援を含めた環境作り）
- ②主体的に取り組める授業（準備から片付けまで見通しを持って取り組める）
- ③自分の活動の軌跡を自分で確認できる授業（自己評価でき、達成感を持てる）

今回の壁画制作はまさにそのような授業でした。完璧な授業はなかなかできないと思いますが、見ている者が参加したくなる授業は、教室に入った瞬間に分かるものです。それは言葉では伝えにくいのですが、私も一緒に壁画制作がしたくなりました。さらに、院生が毎回授業を省察し、一人一人に適切な

環境を設定してくれました。何よりも教室に入った瞬間に制作する気持ちにさせてくれるのです。生徒の個性と学生さんの個性がしっかり組み合わせり自然な流れの中でのびのびと活動していました。

附属特別支援学校ではいつも生徒がのびのびと授業に参加しています。畑で育てた野菜を使ってピザ窯でピザを焼いたり、越前の土を使った焼き物をしたり、さをり織りをしたり、どの生徒も主体的に見通しを持って活動に参加し、達成感を持つようになっています。このようにして自信を付け自己有用感が持てるように授業研究をしています。附属特別支援学校の研究大会や見学にもぜひお越しください。お待ちしております。

※ご所属は当時のものです。

福井大学基金にもとづく
福井大学教職大学院
次世代教育創成資金

明日の学校をつくる協働の実践と探究を支えるために
明日の教師の学びを支えるために

次世代教育創成資金に
ぜひご協力ください。



詳細はパンフレットにてご確認ください。

教職大学院 Newsletter **No.119**

2019.2.15 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dptdfukui@yahoo.co.jp